

# 変わる日本の 「暮らし」と「まち」

## 復興のシンボルとなる 3つの施設がオープン

福島県双葉町  
中野地区一団地の復興再生拠点  
市街地形成施設事業  
(2017年・平成29年)

阿部民子 text by Taniko Abe



illustration: Shigeyuki Sakata

雲一つない秋晴れの空に、勇壮な太鼓の音が鳴り響く。腹の底にまで届くような「標葉せんだん太鼓」の力強い演奏が終わると、観客から大きな拍手が沸き上がった。

2020年11月7日。福島県双葉町の海沿いに位置する中野地区で行われた「東日本大震災・原子力災害伝承館、双葉町産業交流センター、福島県復興祈念公園 合同開所式」のオープニングイベントでの一コマだ。当日は、9時半から郷土芸能の披露や双葉町のシンボルでもある「双葉ダルマ」の

絵付け体験や高齢者などの移動手段として導入が検討され、ウオーカブルなまちづくりに資するスマートモビリティの試乗会などの催し物も盛りだくさん。震災以来静かだったまちに、久々に人々の笑顔が蘇った。

14時からは、新たな3施設の開所を祝う式典が開催された。内堀雅雄福島県知事は「多くの方々が震災と原子力災害を自分事としてとらえ、福島の復興に関心をもっていただけるよう、市町村や関係機関と連携をしながら取り組みを



産業交流センターなど中野地区は今後の双葉町の産業発展の軸となる。

いる双葉町。2020年は復興へ大きく歩みを進めた1年となった。

3月4日に、避難指示が一部解除。続く7日に常磐自動車道常磐双葉インターチェンジが開通。さらに14日にはJR常磐線全線運転再開と、うれしい出来事が続いた。

今回、3施設が開所となった中野地区は、「働く拠点」として新たな産業・雇用の場を整備するとともに、復興祈念ゾーンとして、先行的に整備が進められてきた。

県が整備した伝承館と復興祈念公園の一部は、9月20日にオープンした。伝承館に入るとまず圧倒されるのが、7面巨大スクリーンによる災害当時の映像だ。ゆるやかなスロープを上った先には、震災の爪痕を物語る資料や映像で、複合災害の教訓と復興への歩みを展示。開館後20日で約1万人が来訪、学校の研修も多いという。

一方、10月1日にオープンしたのが、双葉町整備による産業交流センターだ。双葉町復興推進課の横山敦さんは「就業者のサポートや、伝承館・祈念公園来訪者の休憩や食事のサポート、また一時帰宅する町民のサポート拠点とな

る、中野地区のシンボル施設です。施設内の貸事務所には10社が入居、復興産業拠点には、現在17件の立地が決定しています。中野地区には、10月28日からJR常磐線のダイヤに合わせてシャトルバスが運行。施設の隣地にホテル建設も決まり、徐々に働く場としての整備が進んでいます」と話す。

施設内には、双葉町のソウルフードが食べられるフードコートや、中野地区に進出を決めた浅野燃系と双葉町が共同開発した大人気タオル「ダキシメテフタバ」などを販売する土産物店もオープン。4階には展望テラスもあり、取材当日には復興が進む町を感慨深げに眺める町民の姿も見られた。

### 続く復興への道

未曾有、未体験の大災害から、復興への歩みを進める双葉町。その大きな支えとなっているのが、UR都市機構だ。数々のまちづくりや阪神淡路大震災以来の被災地復旧・復興での経験とノウハウで、東日本大震災被災地の復興支援にも尽力。双葉町とは2017年に復興まちづくりに関する協力

を進めていく」と力強く宣言。伊澤史朗双葉町長は「中野地区は、双葉町の復興の先駆けとして重要な役割を担う場所。今般の開所は、町ににぎわいを取り戻す第一歩。双葉町の復興をさらに前進させ、地方創生のモデルとなる新たなまちづくりに挑戦する」と決意をに

### なりわい再生の拠点に

地震、津波、原発事故の複合災害に見舞われ、住民避難が続いて

協定書を締結。JR双葉駅西側地区の基盤整備や宅地、道路、東側駅前広場整備などのほか、中野地区でも基盤整備と産業交流センターの支援を担ってきた。しかし、

経験豊富なURにとっても、双葉町ならではの苦労があったという。赴任して4年目になるUR双葉復興支援事務所の佐藤史章が語る。「双葉町は避難指示区域で住民全員が避難していたため、赴任当ても発災時のままでした。電気も水道もなく、橋も流されて進入路は1本のみ。地区に入るには通行証も必要な状況でした。それだけに3年でここまでできた感慨とともに、今後2、3年でさらに大きく変わるだろうという期待を抱いています」

UR福島震災復興支援本部の太田巨は、糸魚川市駅北大火の復興支援から当地区の任務に就いた。「中野地区は、同じ街区のなかに町と県、国など、整備する主体が異なる場所が混在しているため、工期や工事車両の調整などが円滑に進むよう苦心しました。今後は、双葉町が『住む拠点』と位置づけるJR双葉駅西側地区でも、

引き続き支援していきます」

双葉町の横山さんは、生まれ育った町で被災した一人。災害当日に何も持たずに家を離れ、長らく避難生活を送った経験をもつ。

「まだまだ大変ですが、ようやく目に見えて発信できる復興になってきたと実感しています。中野地区は、土地の造成をしながら水道や道路などのインフラ、建物の建設と複数の事業が重なって密集し、複合的な仕切りが必要な現場でした。町だけではできないところを、URさんには本当に助けていただきました。新しく生まれ変わるまちには、ぜひ多くの方に興味を持っていただき、外部にもファンを増やしていけたら」と話す。

3施設の開所により、新たな産業や復興ツーリズムの創生も期待される双葉町。22年春頃の避難指示解除と居住開始、そしてその先の未来へ。双葉町の復興への歩みは、これからも続いていく。

街に、ルネッサンス

 UR 都市機構

一日も早い東北の復興へ 全力で取り組んでいます

[企画制作] 新潮社